

仮名字母の出現傾向を用いた日大三条西家本源氏物語の調査

齊藤 鉄也（淑徳大学 経営学部）

本稿では、室町時代後期の三条西家の人物である、三条西実隆、公順、公条、実枝によって書写された、日本大学所蔵の三条西家本源氏物語と、これらの人物が書写したとされる古典籍を調査対象として、写本の本文の仮名字母を用いた書写者と年代の推定の調査報告をする。その結果、調査対象の資料は、公条筆とそれ以外の資料に分類できること、そのうちの一部の資料に関しては書写年代で分類できる可能性があること、を明らかにした。

A Survey of Trends in the Usage of *Kana*-character Variants in the Sanjōnishi-line Manuscript of the *Tale of Genji* in the Collections of Nihon University Tetsuya Saito (College of Business Administration, Shukutoku University)

In this paper, I communicate the results of a study that attempted to identify the copyist and copy-date of certain manuscripts by analyzing *kana*-character variants within the texts they contain. The manuscripts thus surveyed consisted of (1) the Sanjōnishi-line text of the *Tale of Genji* housed in the archives of Nihon University, copied by members of the Sanjōnishi household in the late Muromachi period: Sanjōnishi Sanetaka, Kinjun, Kin'eda, and Saneki; and (2) manuscripts of other classic literary texts said to have been copied by the same people. The result of this investigation showed (1) that the documents surveyed can be divided into two groups: those by Kin'eda's own hand and those by others; and (2) that at least for some of those documents it may be possible to divide them by date of copying.

1. はじめに

本論文では、藤原定家(1162 - 1241)による書写資料の仮名字母の出現傾向の調査結果[1]から得られた知見に基づき、同様の手法を用いて、室町時代後期の三条西家の人物による資料の仮名字母の出現傾向を調査した結果を報告する。定家筆資料に関しては、定家が自身の仮名字母の選択方針を用いて書写している可能性と、書写年代ごとに仮名字母を使い分けている可能性を指摘した。しかし、他の人物による書写資料に関しては、その仮名字母の出現傾向は明らかではない。そこで、定家の書写資料で用いた手法を他の資料に適用し、その手法と得られた知見の有効性の確認を本論文の目的として、書写年代や書写者が明らかな資料を用い、この疑問を検証することとした。

調査対象とした写本は、日本大学所蔵三条西家本(以下、日大三条西家本と略す)源氏物語を中心とし、三条西実隆(1455 - 1537)[2]、実隆の長男である公順(1484 - ?)、実隆の次男であり、かつ、嫡子である公条(1487 - 1563)、実隆の孫である実枝(1511 - 1579)による(とされる)写本の一部、計 80 写本である。その方法は、前稿と同様に、各写本の仮名字母の出現頻度率を求め、教師なし分類法である、クラスター分析と主成分分析、系統学的手法を適用し、書写者と年代の推定を試みた。

その結果、仮名字母の出現傾向の点から、調査対象とした資料は、三条西公条筆とそれ以外の資料に分類できること、そのうち一部の資料に関し

ては書写年代で分類できる可能性があること、を明らかにした。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、仮名字母の出現傾向を用いてマクロな視点からは書写者の推定、ミクロな視点からは同一の書写者による写本の年代推定の可能性を調査することである。

現在まで存在する写本のうち書写者と書写年代が明らかな写本は少なく、同一人物による書写の可能性の指摘は、筆跡や書写年代、写本の形態といった書誌学からの知見に基づいて行われてきた。これまで、これらの書誌に関する外的な情報は調査されてきたが、本文や表記といった内的な情報に関してはこれからの研究課題となっている。一方で、文学分野における意味の分析や解釈とは異なる、計量的な手法を用いた古典籍の調査は、その特徴量や手法の探索が必要なこともあり、研究事例が少ない。そこで、本研究では、これまでの書誌学や文献学による研究成果を「仮説」として位置付け、仮名字母の出現傾向という、再現性のあるデータと統計学の手法に基づき、書誌学や文献学とは異なる根拠から、仮説の検証を行う。本研究の調査結果がこれまでの知見と一致する場合は、既存の知見を補強し、その蓋然性を高めることができる。

この問題意識に基づき、これまで、仮名字母の出現傾向が特徴量として有効である可能性を検証してきた。その結果、仮名字母の出現傾向は、

藤原定家筆とされる写本と、親子兄弟や周辺の人物の写本とで異なり、筆跡とは異なる根拠に基づいて、書写者の分類ができる可能性があること、そのうち一部の写本に関しては年代の推定ができる可能性があること、を指摘した。しかし、この知見が他の書写者に対しても有効であることを示すためには、より多くの書写者が明らかな写本の調査が必要である。そこで、本論文では、前稿[1]と同じ手法を用いて、写本の調査を試みた。同様の調査を行うことで、前稿で得られた知見を検証することができると同時に、より多くの事例を調査することで、得られた知見の可能性と限界を明らかにすることが可能である。加えて、仮名字母の出現傾向に関する計量文献学の知見を同様の手法を用いて積み重ねることで、さらなる写本の位置付けを明らかにできる可能性がある。例えば、既存の文献学の書写者の推定や年代推定だけではなく、成立圏の推定といった、文献学や書誌学の知見により写本間の関係が指摘されながら、写本の形態以外に共通点が存在しない写本間の関係を発見できる可能性がある。この点で、本研究は、この応用事例の基礎的な知見を得る研究の一つと言える。

3. 調査対象と生成した本文データ

本調査では、上記の知見の有効性を検証するために、書写者が明らかであり、現在まで資料が多く存在し、公開され利用が容易な、室町時代後期の三条西家の人物による計 80 写本を調査対象とした。それらを書写した人物は、三条西実隆、その長男の公順、次男の公条、実隆の孫の実枝の四人である。

調査対象の内訳は日大三条西家本源氏物語 53 帖[3]を中心に、蓬左文庫蔵三条西家本源氏物語[4]、実隆筆とされる源氏物語写本、新撰菟玖波集実隆本、伝公条筆源語古鈔を含む。日大三条西家本源氏物語は、第 38 帖「夕霧」が欠けているため 53 帖を調査対象としている。このうち第 43 帖「紅梅」は公条筆であるが、早い時期に失われ、公条により補写されているため、本文の文字の大きさや行数が異なる。日大三条西家本は、一部の巻の最後に記入されている書写日時や書写者の記述と、実隆の日記である「実隆公記」の記述から、一部の巻に関しては書写日時や校訂日時が明らかである。このため、日大三条西家本の書写状況を知ることができ、写本の順序も公条筆の第 1 帖「桐壺」から第 7 帖「紅葉賀」を除き、実隆筆の第 8 帖「花宴」から書写され、その後、巻数に従って順に、1530 年から 1531 年にかけて約 1 年間で書写されたことが明らかである。

加えて、蓬左文庫蔵三条西家本源氏物語のうち、数帖が三条西家の人物による書写とされている。その内訳は、実隆筆とされる第 3 帖「空蟬」、第 16 帖「閑屋」、公順筆とされる第 25 帖「螢」、第

43 帖「紅梅」、公条筆とされる第 18 帖「松風」、第 24 帖「胡蝶」、第 45 帖「橋姫」、第 54 帖「夢浮橋」、実枝筆とされる第 18 帖「絵合」、第 23 帖「初音」が存在する。

この他にも、書写年代が異なる書陵部蔵三条西家本源氏物語のうち第 27 帖「篝火」と、榊原家本源氏物語の第 1 帖「桐壺」が実隆による書写である。また、実隆筆とされる保坂本源氏物語の第 11 帖「花散里」が存在する。これらの源氏物語の他に古今和歌集や伊勢物語といった写本も存在する。この様に室町時代後期の三条西家の人物による写本は多く残っていることから、書写者の推定の調査対象として適している。

本調査で調査対象とした写本名と(推定を含む)書写者、書写年代が明らかな場合は書写年、本文の調査範囲、仮名字数と仮名字母数を本論文末の表 1 と表 2 にまとめた。書写年代は、文献学の研究成果に基づいて記述されている、各写本の解題の(推定)書写年代を採用した。写本名称とその出典も本論文末にまとめた。

調査対象とした本文データは、前稿と同様に、本行本文の変体仮名を仮名字母ごとに集計し、同音の仮名字母ごとに出現頻度率を求めた。写本に出現する仮名字母の出現頻度率を仮名字母の出現傾向とみなしている。本文の漢字は対象としていない。挿入されている本文や、誤字や脱字を修正した文字といった傍記も対象としていない。繰り返し符号である踊り字も対象としていない。

調査した本文範囲は、これまで藤原定家の写本に関して得られた知見である「階層的クラスター分析を行う場合、最低 2500 字程度あれば、書写者で分類できること」を確認した結果、調査対象の資料においても同様の結果が得られたことから、20 ページ(10 丁)程度を目安に約 3000 字の本文を調査することとした。

4. 調査結果の概要と考察

最初に、藤原定家書写の写本から得られた「階層的クラスター分析を行う場合、2500 字程度の文字数があれば、写本間の距離の変動が安定する」という知見を検証するために、日大三条西家本のうち実隆筆の第 51 帖「浮舟」と実隆筆の写本との距離、公条筆の第 22 帖「玉鬘」と公条筆写本との距離を調査した。距離の計算方法には IR 距離[6]を用いた。

次に、マクロな視点から分類の概要を把握するために、調査対象とした各写本の仮名字母の出現傾向に対して、階層的クラスター分析を行った。階層的クラスター分析では、写本間の距離に IR 距離を用い、クラスター間の距離には、群平均法を用いた。さらに、同様のデータに対して、主成

分分析を用いて階層的クラスター分析の裏付けを試みた。主成分分析を行った後、k 平均法を用いた非階層的クラスター分析を行った。

最後に、ミクロな視点から同一書写者による写本間の距離を確認するために、書写者ごとに系統樹を用いて写本間の関係を可視化した。

4.1 本文文字数と距離の関係の考察

図 1 は、実隆筆の第 51 帖「浮舟」と実隆筆の写本との距離を表した結果である。「浮舟」と比較している写本は、第 8 帖「花宴」、第 11 帖「花散里」、第 16 帖「閑屋」、第 23 帖「初音」、第 27 帖「篝火」、第 30 帖「藤袴」である。同様に図 2 は、公条筆の第 22 帖「玉鬘」と公条筆の写本との距離を表した結果である。「玉鬘」と比較している写本は、第 3 帖「空蟬」、第 29 帖「行幸」、第 38 帖「鈴虫」、第 48 帖「早蕨」である。これらの比較対象とした写本は、全文を調査対象としている。

最初に、実隆筆写本について考察を述べる。図 1 からは、実隆筆「浮舟」と他の写本の距離に関して、約 2500 字までは距離の変動が大きいこと、約 5000 字以上の距離は、それより文字数が少ない場合と比較して安定していること、実隆筆の写本の距離がいくつかの群に別れていること、を示している。後者に関しては、実隆筆は同時期に書写された写本がいくつかに分類されることが予想できる。

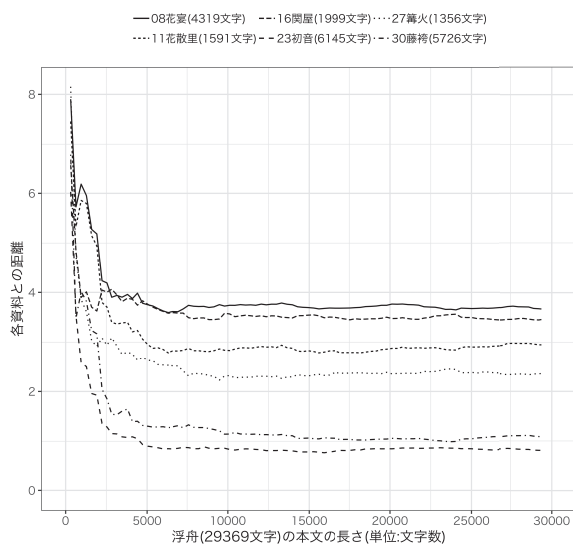


図 1: 実隆筆「浮舟」と他の実隆筆写本との距離

加えて、「花散里」「閑屋」「篝火」といった本文長が 2500 字以下である写本では、距離を計算する比較対象の「浮舟」が 5000 字を超えた場合であっても、距離が近づくことはなく、距離の下限があることを示している。

次に、公条筆写本においても同様の調査を行う。図 2 から、公条筆「玉鬘」と他の写本の距離は、約 2500 字までは距離が近づき、それ以後はほぼ一定であること、を示している。また、公条筆は互いに写本間の距離が近く、ひとつの群を構成することが予想できる。

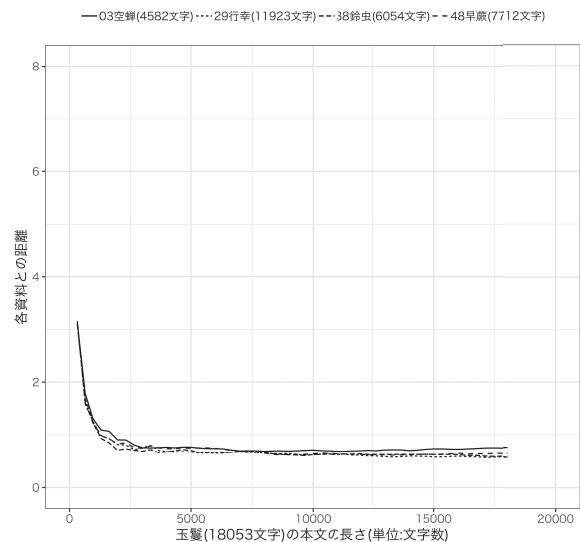


図 2: 公条筆「玉鬘」と他の公条筆写本との距離

これらの調査結果から、藤原定家で得られた文字数と距離の関係の知見が、本調査対象の写本においても有効であることを示していると言える。つまり、少なくとも 2500 字以上であれば、写本間の距離が安定し始め、5000 字以上であれば、それ以上のデータが必要ないことを表している。但し、文字数が少ない資料を調査対象とする場合には、文字数が少ないことが原因で資料間の距離が遠いのか、または、仮名字母の出現傾向が異なることが原因で資料間の距離が遠いのか、が明らかではなく、2500 字以下の資料に関しては、本手法を用いることの限界がある、と言える。この結果は、今後、写本の調査をする際に有効な知見であると言える。

加えて、この知見が他の距離の計算方法を用いた場合においても同様であることを確認するために、ユークリッド距離とコサイン距離を用いて調査した。その結果は、文字数と距離の関係は同様の結果となった。このことから、今後の調査においては、この 2500 字または 5000 字という文字数を目処に調査する方針が得られた。

4.2 階層的クラスター分析の結果と考察

写本間の全体の関係を概観するために、階層的クラスター分析を行った。その結果を図 3 に表す。図 3 では、距離 2 の位置にクラスターを分割する点線を引いている。

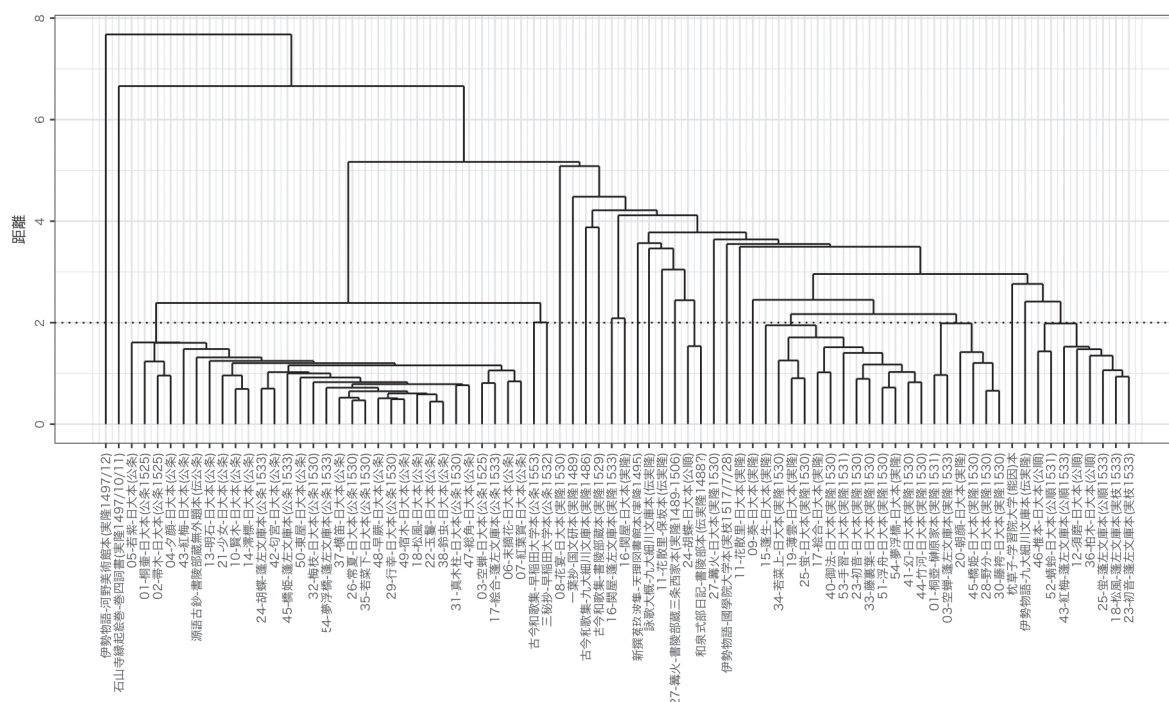


図3：階層的クラスター分析の調査結果

概観すると、図3では、左側に公条筆とされる写本が位置している。公条筆の写本は互いに仮名字母の出現傾向が似ていることから、その距離が近いことを示している。右側にそれ以外の人物による写本が位置している。

このうち例外となる写本が最も左に位置している1497年に実隆が書写した伊勢物語と石山寺縁起絵巻の詞書である。これらの写本は公条筆ともその他の実隆筆の写本と最も離れた位置に分類されている。

伊勢物語の距離が遠い理由は、この写本が藤原定家筆の1234(天福2)年に書写された、いわゆる天福本伊勢物語を漢字や仮名字母まで同一に書写した写本であるためである。この結果、この写本の仮名字母の出現傾向は、定家の仮名字母の出現傾向に近く、その他の実隆の仮名字母の出現傾向とは異なっている。

石山寺縁起絵巻の詞書の距離が遠い理由は、仮名字数が少ないためと考えられる。この資料の場合、仮名字母の出現傾向が他の実隆筆と異なっている可能性もあるが、文字数が少ないことが原因で詳細を明らかにすることができない。

左側に位置している公条筆写本が集まるクラスターの中では、右端の二つの早稲田大学本を除き、公条筆の源氏物語の写本は、互いに非常に距離が近い。この中には、伝公条筆とされる源語古鈔も存在し、公条筆と分類されている。この結果は、仮名字母の出現傾向において、この写本は他の公条筆の写本と差がないことを示していると

言え、伝承筆者と指摘されている公条による書写の蓋然性を高めている。

また、公条筆源氏物語が集まるクラスターの左端には1525年に書写された写本が二つ存在し、これらの写本と第4帖「夕顔」の距離が近いことを示している。このことは、書写年代に関して、写本の奥書や「実隆公記」に記録がない「夕顔」が1525年に書写された可能性を示している。

公条筆の中では相対的に距離が遠い二つの早稲田大学本は、源氏物語写本と異なる仮名字母の出現傾向を持つことを示唆している。特に、三秘抄は、源氏物語写本とも書写年代が近く、同時期に異なる仮名字母の出現傾向を持つ写本の存在を示している。この結果に関しては、計量的な手法ではその原因を分析することはできず、文学や文献学といった異なる分野の知見が必要である。

右側に位置しているクラスターは、実隆と公順、実枝が存在し、書写者によって分類されていない結果となった。これらの公条以外の人物による写本は、おおよそ距離2以下に写本が集まる公条筆のクラスターと比較して、全体的に距離が遠く、書写者や書写年代もばらついていて、これらの写本に関して何らかの共通の性質を見つけることは困難である。このうち一部の写本が、距離2以下のいくつかの小クラスターに分類されているため、これらの小クラスターについて検討する。

最も右側には、公順筆と実枝筆の写本を含む小クラスターが位置している。これらの写本は公条筆と比較しても同程度に近い距離の関係にある。

最後に上記で述べた以外の写本に関して検討する。これらの写本の中では、和泉式部日記と公順筆の第 24 帖「胡蝶」の距離が互いに近いと言える。「胡蝶」の奥書には「此巻古本欠愚筆ノ本也」とあり、この写本の元となった親本は実隆筆の写本であるとの記述がある。この「胡蝶」と和泉式部日記の距離の近さは、右側に位置する実隆筆の源氏物語写本間の距離とほぼ同等である。また、右端に位置するその他の公順筆とは異なる仮名字母の出現傾向を持つことも明らかである。このことから、公順が実隆筆の「胡蝶」の写本を忠実に書写した可能性や、和泉式部日記は実隆筆の可能性があることを推測することができる。但し、1530 年以前の実隆筆写本の仮名字母の出現傾向が小クラスターを構成していないことから不明なことが多く、可能性の指摘に留まる。

以上のことから、公条筆の写本は他の三条西家の人物による写本と仮名字母の出現傾向を用いて分類することができること、が明らかになった。その一方で、公条以外の三条西家の人物による写本は、仮名字母の出現傾向だけでは分類できないこともあること、実隆筆とされる写本は一部の写本が互いに近いこと、が明らかになった。

主成分分析を行う前に、調査対象としている 369 種類の仮名字母のうち、出現しない字母と、多くの資料で出現率が 100% に近く、資料間で差がない字母を除外した。加えて、同音の仮名の中で相関が高い 2 つの字母は、どちらか一方を分析



この結果は 4.2 節で述べた階層的クラスター分析とは基本的な分類結果は同様ではあるが、いくつかの点で異なっている。例えば、定家筆を忠実に書写した実隆筆の伊勢物語も他のいくつかの実隆筆の写本と同じ群に分類されている。また、階層的クラスター分析では距離が遠く、群を構成していない資料も、いずれかの群に分類されている。このことから、公条筆写本は分類されているが、その他の写本に関しては、何らかの共通の性質を持つ分類はされていないと言える。

4.2 節及び 4.3 節において，公条筆写本は互いに近い距離にあることが明らかになった．その中

でも、1525年に書写された写本は互いに近い距離にある可能性を指摘した。そこで、系統学的手法を用いて、公条筆写本の分類を試みた。IR 距離を用いた Neighbor-net[7]ネットワークを図5に示す。

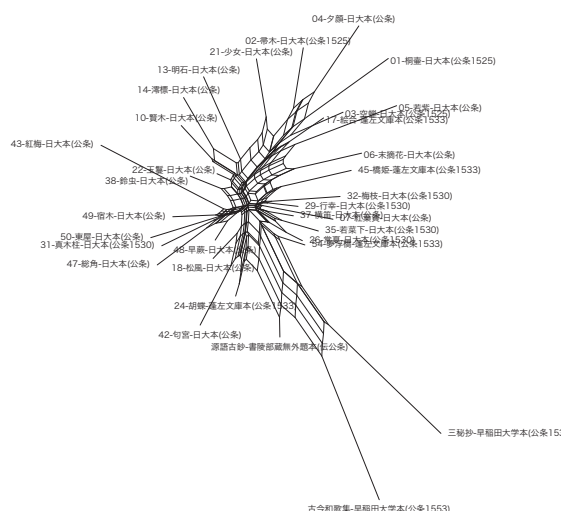


図5：公条筆写本の Neighbor-net ネットワーク

図5の上部に1525年に書写された写本が集まっている。1525年に書写されたことが明らかな「桐壺」から「空蟬」に加えて、「夕顔」もこれらの写本に近いことが明らかになった。このことから、「夕顔」も近い時期に書写された可能性を指摘できる。一方で、書写年代が不明な「若紫」や「末摘花」もこれらの写本と相対的に近いと考えることはできるが、蓬左文庫本「絵合」がより近く、その関係は明らかではない。

3章で述べた様に、日大三条西家本は巻の順序に従って書写されたと考えられているが、この系統樹は何らかの共通の性質に基づいて分類された結果には見えない。そのため、詳細な分類に関する考察は難しい。

4.5 考察のまとめ

これまでの分析では、仮名字母の出現傾向を特徴量として用いて、マクロの視点からの書写者による分類と、ミクロな視点からの年代による分類を試みてきた。ここでは、複数の教師なし分類手法を用いた結果を比較する。

階層的クラスター分析は、距離の計算方法とクラスターの構成方法を組み合わせた木構造で結果を可視化するため、マクロとミクロの二つの視点を持つ手法と言える。クラスターの構成方法によって分類対象間の関係は変化することから、クラスターを構成する分類対象が安定しない場合があるが、距離が極めて近い対象の結果は安定し

ている。

主成分分析はマクロの視点から書写者の分類をするためには適しているが、分類した結果を考察するために、詳細な情報を表現することは難しい。一方で、系統樹を用いた分析は詳細を考察するには適しているが、クラスター分析や主成分分析によって分類された結果を踏まえて、その分析対象を選択する必要がある。また、階層的クラスター分析と系統樹を用いた分析結果は、距離の計算方法が同一であっても分類結果が同一にはならない。

複数の調査方法による結果を比較すると、マクロの視点からは、特徴的な仮名字母の出現傾向を持つ書写者が存在する場合には、その発見は可能であると言える。ミクロな視点からは、書写者や書写年代が明らかな資料を基準として、それと距離が近い資料を発見できる可能性もある。但し、教師なし分類手法の限界として、「正しい分類結果」がわからないため、複数の異なる手法や根拠によって検証を行う必要がある。

また、書写者や書写年代といった何らかの分類結果を得ることができたとして、資料の持つ書誌情報と資料間の距離の近さから、何らかの推定を試みることは可能である。しかし、仮名字母の出現傾向という現象の記述から、その相違や変化の原因を推定することは難しく、異なる視点や方法を用いた調査が必要である。

5. まとめ

本論文では、日大三条西家本源氏物語を中心に、仮名字母の出現傾向を用いた書写者と年代の推定の可能性の調査報告を行った。調査対象は、仮名字母の収集が可能な影印本や画像が公開されている、室町時代後期の三条西家の人物による写本である。これらの写本に対し、統計的な分類手法を用いて分類を行い、その結果を既存の文学や文献学の知見である書写者や書写年代と比較し検討した。

調査結果からは、これまでの文献学の知見と同等の結果も存在することから、仮名字母の出現傾向に基づいて書写者や年代を分類するという本手法の有効性を示している可能性がある。この結果は、数値データと統計的手法という文学や文献学とは異なる根拠に基づいて、既存の知見を裏付けているともいえ、両分野の知見を互いに補完し、その蓋然性を高めている。

今後の課題としては、既存の研究成果と比較するために調査対象の写本を増やすこと、文学や文献学、書誌学分野で関連性が指摘されている写本に関して、今回と同様の調査手法を適用し、これまでに得られた知見との照応と検証をすることがある。

表1: 調査対象とした日本大学蔵及び蓬左文庫蔵三条西家本源氏物語の写本

写本名と(伝承)書写者、書写年代	調査対象本文	仮名文字数	仮名字母数
01-桐壺-日大本(公条 1525)	11 丁オまで	3378	106
02-帚木-日大本(公条 1525)	11 丁オまで	3348	103
03-空蟬-日大本(公条 1525)	全文	4582	105
04-夕顔-日大本(公条)	11 丁オまで	3339	101
05-若紫-日大本(公条)	11 丁オまで	3265	99
06-末摘花-日大本(公条)	11 丁オまで	3317	96
07-紅葉賀-日大本(公条)	11 丁オまで	3539	100
08-花宴-日大本(実隆 1530)	全文	4319	108
09-葵-日大本(実隆)	11 丁オまで	3174	99
10-賢木-日大本(公条)	11 丁オまで	3208	104
11-花散里-日大本(実隆)	全文	1591	89
12-須磨-日大本(公順)	11 丁オまで	3098	102
13-明石-日大本(公条)	11 丁オまで	3191	102
14-霧標-日大本(公条)	11 丁オまで	3257	97
15-蓬生-日大本(実隆)	11 丁オまで	3403	98
16-閑屋-日大本(実隆)	全文	1999	98
17-絵合-日大本(実隆)	11 丁オまで	3441	102
18-松風-日大本(公条)	11 丁オまで	3352	99
19-薄雲-日大本(実隆)	11 丁オまで	3407	100
20-朝顔-日大本(実隆)	11 丁オまで	3305	104
21-少女-日大本(公条)	11 丁オまで	3236	100
22-玉鬘-日大本(公条)	全文	18053	106
23-初音-日大本(実隆 1530)	全文	6145	109
24-胡蝶-日大本(公順)	11 丁オまで	3500	113
25-蛭-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3317	98
26-常夏-日大本(公条 1530)	11 丁オまで	3321	101
27-篝火-日大本(実隆 1530)	全文	1356	106
28-野分-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3214	106
29-行幸-日大本(公条)	全文	11923	103
30-藤袴-日大本(実隆 1530)	全文	5726	107
31-真木柱-日大本(公条 1530)	11 丁オまで	3368	96
32-梅枝-日大本(公条 1530)	11 丁オまで	3276	97
33-藤裏葉-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3093	106
34-若菜上-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3542	104
35-若菜下-日大本(公条 1530)	11 丁オまで	3310	95
36-柏木-日大本(公順)	10 丁ウまで	3348	102
37-横笛-日大本(公条)	11 丁オまで	3439	97
38-鈴虫-日大本(公条)	全文	6054	99
39-夕霧			
40-御法-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3334	103
41-幻-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3380	102
42-匂兵部卿宮-日大本(公条)	11 丁オまで	3354	100
43-紅梅-日大本(公条)	8 丁オまで	3669	96
44-竹河-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3430	102
45-橋姫-日大本(実隆 1530)	11 丁オまで	3371	107
46-椎本-日大本(公順 1531)	11 丁オまで	3097	100
47-総角-日大本(公条)	11 丁オまで	3402	92
48-早蕨-日大本(公条)	全文	7712	102
49-宿木-日大本(公条)	11 丁オまで	3390	95
50-東屋-日大本(公条)	11 丁オまで	3403	93
51-浮舟-日大本(実隆 1530)	全文	29369	126
52-蜻蛉-日大本(公順)	11 丁オまで	3383	96
53-手習-日大本(実隆 1531)	11 丁オまで	3398	102
54-夢浮橋-日大本(実隆)	11 丁オまで	3382	101
03-空蟬-蓬左文庫本(実隆 1533)	全文	4573	111
16-閑屋-蓬左文庫本(実隆 1533)	全文	1970	99
17-絵合-蓬左文庫本(公条 1533)	11 丁オまで	3191	101
18-松風-蓬左文庫本(実枝 1533)	11 丁オまで	3481	100
23-初音-蓬左文庫本(実枝 1533)	11 丁オまで	3412	105
24-胡蝶-蓬左文庫本(公条 1533)	11 丁オまで	3327	99
25-蛭-蓬左文庫本(公順 1533)	11 丁オまで	4024	103
43-紅梅-蓬左文庫本(公順 1533)	11 丁オまで	3411	97
45-橋姫-蓬左文庫本(公条 1533)	11 丁オまで	3414	97
54-夢浮橋-蓬左文庫本(公条 1533)	11 丁オまで	3367	97

表 2: 調査対象としたその他の三条西家の人物による写本

写本名と(伝承)書写者、書写年代	調査対象本文	仮名字数	仮名字母数
01-桐壺-榊原家本(実隆 1531)	11 丁オまで	3377	113
11-花散里-保坂本(実隆)	全文	1585	105
27-篝火-書陵部蔵三条西家本(実隆 1489-1506)	全文	1360	103
和泉式部日記-書陵部本(伝実隆 1488?)	11 丁オまで	3399	105
石山寺縁起絵巻-巻四詞書(実隆 1497/10/11)	全文	1096	106
伊勢物語-河野美術館本(実隆 1497/12)	13 丁オまで	3662	90
伊勢物語-國學院大学本(実枝 1517/7/28)	11 丁オまで	3639	103
伊勢物語-九大細川文庫本(伝実隆)	15 丁オまで	3476	102
一葉抄-国文研本(実隆 1489)	6 丁オまで	3748	110
詠歌大概-九大細川文庫本(伝実隆)	全文	2756	106
源語古鈔-書陵部蔵無外題本(伝公条)	全文	15091	122
古今和歌集-九大細川文庫本(実隆 1486)	14 丁ウまで	4449	114
古今和歌集-書陵部本(実隆 1529)	12 丁オまで	4370	106
古今和歌集-早稲田大学本(公条 1553)	11 丁ウまで	4370	107
三鈔(三秘抄)-早稲田大学本(公条 1532)	16 丁オまで	3945	108
新撰菟玖波集-天理図書館本(実隆 1495)	41 丁オまで	6981	139
枕草子-学習院大学(能因)本	8 丁オまで	3737	108

出典

● 『源氏物語』

- 1) 日大三条西家本, 日本大学蔵源氏物語, 八木書店.
- 2) 蓬左文庫本, 名古屋市蓬左文庫, 1-164-4.
<http://housa.city.nagoya.jp/index.html>
- 3) 榊原家本, 国文学研究資料館, 99-165-1.
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_200016474
- 4) 保坂本, 保坂本源氏物語, おうふう.
- 5) 書陵部蔵三条西家本, 宮内庁書陵部蔵青表紙源氏物語, 新典社.

● 『伊勢物語』

- 6) 伊勢物語実隆筆天福本, 愛媛大学古典叢刊刊行会.
- 7) 伊勢物語三条西実枝筆, 國學院大學図書館デジタルライブラリー.
<http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/ise91332sa64/mag1/pages/page001.html>
- 8) 九大細川文庫本, 九州大学附属図書館細川文庫.
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100002226
- 9) 九大細川文庫本, 九州大学附属図書館細川文庫.
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100002176
- 10) 古今和歌集書陵部本, 宮内庁書陵部図書寮文庫.
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000230150000>
- 11) 早稲田大学本, 早稲田大学図書館.
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he04/he04_06080/index.html

● その他写本

- 12) 和泉式部日記三条西家本, 日本古典文学刊行会.
- 13) 石山寺縁起絵巻, 日本絵巻大成 18, 中央公論新社.
- 14) 一葉抄, 国文学研究資料館, 99-71.
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_200006811
- 15) 詠歌大概, 九州大学附属図書館細川文庫.
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100168761
- 16) 源語古鈔, 宮内庁書陵部, 20-454-2.
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100130635

17) 三鈔(三秘抄), 早稲田大学図書館.

http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he02/he02_04867_0004/index.html

18) 新撰菟玖波集, 天理図書館善本叢書 20, 八木書店.
19) 能因本枕草子, 学習院大学蔵, 笠間書院.

参考文献

- [1] 齊藤鉄也: 仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査, 情報処理学会論文誌, Vol.59, No.2, pp.315-322(2018).
- [2] 宮川葉子: 三条西実隆と古典学, 風間書房(1995).
- [3] 岸上慎二: 三条西家証本解題, 日本大学蔵源氏物語第一巻三条西家証本一, pp.503-540, 八木書店(1994).
- [4] 宮川葉子: 蓬左文庫蔵「三条西家本源氏物語」成立の事情, 源氏物語の文化史的研究, pp.89-142, 風間書房(1998).
- [5] 岡野道夫: 蓬左文庫源氏物語の本文-柏木巻について-, 日本大学商学研究会 商学集志, Vol.44, No.2,3,4(合併号), pp.432-422(1974).
- [6] 金明哲: テキストデータの統計科学入門, 岩波書店(2011).
- [7] 中尾央, 三中信宏(編著): 文化系統学への招待, 矢野環: 『老葉』に対する系統学的アプローチ - 宗祇による連歌の系譜, pp.35-63, 勁草書房(2012).